



The Magic Sword "Zordic"

魔剣リルアの成長記録

木原ゆう
KIHARA YUU

3

目次

第六章	天王寺四音	7
第七章	華鏡院しずる	97
第八章	ルーメリア・ラツカーン	179
終章	魔神の誕生	271



ガネーシャ・ザールツレイム

ザールツレイム帝国の第一皇女。魔人ゾルディの使い手となる。

ななせ かおる
七瀬 薫

魔杖ゾルディの使い手。火の属性を操る女子高生魔術師。思ったことをストレートに言うイマドキのJK。

デメル・レインロード

魔剣ゾルディの使い手。ゾルディと離れたあと、ザールツレイム帝国で傭兵長の仕事に就いた。

さとう まもる
佐藤 守

本作の主人公。ブラック企業に勤める芽えないサラリーマン。伝説の武器「魔剣ゾルディ」として、異世界へ転生した。

魔人ゾルディ

ガネーシャの専属執事だったときのゾルディ。形態は魔人。

リリー・メダルロック

魔弓ゾルディの使い手。弓を得意とするエルフっ娘。

メアル・ストラスフィ

いつも目を閉じ穏やかに微笑む美人さん。魔獣ゾルディの使い手となる。

ルーメリア・ラッカーン

ラッカーン帝国の皇女。ドワーフ。魔鎚ゾルディの使い手となる。

かきょういん
華鏡院 しずる

魔刀ゾルディの使い手。七瀬薫と同じ高校出身で先輩。剣の達人。

てんのうじ しおん
天王寺 四音

魔眼ゾルディの使い手。未来の日本の天然中二病女子高生。

主な登場人物



第六章

天王寺四音



北海道立千鳥高等学校に通う高校一年の少女。父親は有名信託銀行の銀行員。母親はデザイナーの仕事と家事を両立している。自他共に認める中二病の女の子でもある。

お気に入りのぬいぐるみは赤いドラゴンの『サンダース』である。

普段から私服は真っ黒のフリフリのゴスロリファッションで過ごし、別に眼病に罹っているわけではないのだが眼帯をしている。ミリタリーオタクで、ちっばいと言われると本気で怒る。



NAME : 天王寺 四音

RACE : 日本

JOB : 高校生

SIZE : B:68,W:55,H:65

EQUIP

unKnown



時は二二〇五年。日本。

魔獣ゾルディとしてメデューサのメアルに仕えていた俺は、メアルの作りだした異空間に呑み込まれ、今度は未来の世界へと飛ばされてしまった。

目の前にいるのはゴスロリファッションの少女で左目に眼帯をしている。

……いや、目の前にいるという表現は正しくない。

俺は彼女の『左目』に姿を変えたのだ。

魔眼として――。

「――ふむふむ、そうなのですか。そんな経緯があったとは……あ、蚊です！ やっつけて下さるー！」

『……お前、絶対分かっていないだろう……はあ……』

彼女の名は天王寺四音。

ここから徒歩で一時間ほどの距離にある『北海道立千鳥高等学校』に通う高校一年の女子生徒だ。

彼女曰く、今、巷で話題になっているのは、世界中で大人気のVRMMO《BLAZE DANCER

オンライン》で起こったとある事件について。

専用の機器を使い仮想空間に入ったまま、約百万人のプレイヤーの意識が戻らないという前代未聞の重大件が発生したという。

しかしそれらの問題に対し、運営元の《クリプトゼグノ社》はもとより、親会社である《ゼイグリ社》も沈黙を続けたまま、事態は一向に収束する気配を見せないでいた。

『……でだ、四音。さっきの話は本当か？ その……なんだったか』

「BDOですよ。《BLAZE DANCER ONLINE》。巷ではブドーの略式で知られているのです。やっぱり和の心というのは大切ですね」

『いや……。そのゲーム、海外で作られたんだろ……』
いかん。

このよく分からん中二病のゴスロリ娘に先手を取られては話が先に進まない――。

「あー、話とは、謎のVRMMO昏睡者百万人！ 徐々に死者が現れた模様！ のニュースのことですか？」

四音はそう言い、大きなモニターに視線を向ける。

すると何かに反応したのか、勝手に電源が作動しニュースが流れ始めた。

（自動でテレビが点く、か……。まあ、未来だから当然か）

ニュースではしきりにコメンテーターが《ゼイグリ社》の危険性を訴えている。

軍用VRMMOを民間用に改良すべくゲーム会社を買収、その後、《クリプトゼグノ社》を子

会社として設立させた——そんな経緯が詳しく述べられていた。

「いやー、この事件にはホント、私も驚いたのですよ。日本でもかなりの人が『ブドー』をプレイしていましたからねえ。確かプレイヤーの半数近くは日本人だったと思いますよ」

『……ということは、五十万もの日本人がまだ昏睡状態に陥っているということか……』
恐らくその昏睡者の中には、かつての俺の主人である七瀬薫の姿もあるのだろう。
ここで俺はあることに気付く。

『そうか……。なあ、四音。そのブドーってゲームをプレイしていた中で、死亡した日本人ってのは調べることが出来るのか?』

「死んだ人、ですかあ? そりゃまあ、これだけ話題になっっているんですから、死亡者のリストくらいは調べれば分か——」

『ならばすぐに調べてくれ! 俺の知り合いが生きているかどうかを知りたいんだ!』
「わわっ! き、急に大きな声を出さないで下さいよう……。頭がガンガンしますですう」

両手で耳を押さえた四音は、そのまま立ち上がり部屋を後にする。

「お母さん! ちょっと図書館に行ってくるね〜!」

台所で料理をしている母親に声を掛ける四音。

そして俺は、初めて未来の景色を眺めることとなった——。

十

『これが北海道たあ、俺の時代の人間が見たらたまげろんだろうなあ……』
図書館までの道中、俺は溜息まじりに率直な感想を述べる。

……魔眼が溜息吐けるかどうかは知らんけど。

「ゾルディ軍曹は二〇〇〇年代初期の戦士だと仰ってましたもんねえ。私もその時代に行ってみただけでありますよ」

『その軍曹つつうのはやめてくれ……』

四音はスキップをしながら綺麗に舗装された道路を進んでいく。

所々に街灯らしきものが見えるが、完全に宙に浮いたまま停止している。

信号機もそっだ。

いったい何処から電源が流れているのかさっぱり分からん……。

俺がきよろきよろしている、すれ違いざまに何度も住人に声を掛けられる四音。

その度に腕をあげ、敬礼のポーズで挨拶をしている。

(こいつの奇怪な行動はともかく……。思っていたよりも全然平和なんだな……)

たしか薫や殺された御堂達の話では、アメリカとの平和条約が破棄されるとか、戦争の下準備に運営がログアウト不能のデスゲームを開始したとか、物騒な内容だったはずなのだが……。

まだ全貌が明らかになっただけではないが、この四音の能天気っぷりから察するに、まだまだ平和であるように見える未来の日本。

しかし――。

(俺をこんな未来の世界に飛ばして、何をさせたいんだよ……神様……)
もはや神の悪戯としか思えない。

異世界に転生させられたと思ったら、今度は未来の世界？

しかもステータスは存在しないわ、武器といえるか分からない形状であるわけで、何もかもが今までとは大きく違う。

(今、俺が出来ることと言ったら、あいつらの無事を確かめるくらいしか無いしな……)

薫の無事は、現実世界の彼女の死を調べることで判明するだろう。

彼女が無事であるならば、一緒にいたデメルも無事である可能性が高い。

しかしメアルは――。

『くそっ……!』

「? ゾルディ軍曹?」

四音が俺を心配し声を掛けてくれる。

きつとメアルは何も悪くはないのだ。

自分の住む世界を脅かす未来人達を排除する――。

それが彼女に与えられた定めだったのだと思う。

だが、同じグランドヴェルグの住人であるデメル達を狙うのは、どう考えても俺にも責任がある。

俺はメアルを彼女にすると言ったのに、他の女にうつつを抜かしていた。

あわよくばハーレムの一員にメアルを迎え入れようとした、俺の浅はかな考え――。

それが仇となり、デメル達の命を危険に晒してしまったのだ。

俺のこの能力は、一体何なのだろう。

使い手に快楽を与え、溺れさせる――。

一度でも俺を使った者は、心から俺を欲し、離そうとはしなくなる。

……そういえば、この魔眼はどのような能力を持っているのだろうか。

ステータスが存在しない現実の世界なのだから、当然HP吸収などというファンタジーなことは起こらないはず。

まさか、今度こそ最弱の能力なのか、それとも――。

「よう、四音」

いきなり声を掛けられ思考が中断させられる。

「げっ、明人……!」

四音がたじろぐのが分かる。

何だ……?」

知り合いに声を掛けられたにしては、彼女の心臓の鼓動が速すぎる気がする。

俺はすでに四音と一体化しているので、彼女の呼吸音や心拍数なども手に取るようによく分かるのだ。

分からないのは、心の声くらいか。

それは恐らく、俺と四音の脳みそが別々に存在している、ということなのだろうけれど……。「どこかに遊びに行く途中か？　なら俺とカラオケにでも行こうぜ？」

明人と呼ばれた男が四音の腕を強引に掴む。まさか彼氏とか言うんじゃないだろうな……。

「嫌ですよ！　もう私にまどわりつかないでください！　警察呼びますよ！」
激しく抵抗する四音。

「彼氏じゃないのか……？
ならばストーカーとか？」

「うるせえな、静かにしろよ。いいじゃねえか、少しくらい。俺のダチもお前に会ってみたいって言ってるしよ」

男は強引に四音の口元を押さえようとする。
うわぁ……。

さっき平和だなんて言っただばかりなのに……。
でも俺、こいつを助けようがないし……。

「がるるう！」

「いてっ!!　てつめえ……。俺に噛み付くなんざ、いい度胸してんじゃねえか！」

男が指を押さえながら四音を睨みつけている。

そこで何を思ったか、四音は左目につけていた眼帯を勢いよく取り外した。

『……え？　なにしてんの四音？』

急に視界が開けてくる。

凄く、不思議な感覚だ。

四音が見ている右目での視点と、俺が見ている左目での視点が交差する。

お互いの視点が混ざる感覚――。

心がざわつく、感覚――。

「ふわーっはっはっは！　我、汝なんじに命ずる――！」

足を開き、地面を踏みしめた四音は謎のポーズをとり、叫び出した。

相手の男はやれやれといった表情で溜息を吐いている。

「……なあ、四音。そういうのはいいからさ。俺のダチと一緒にカラオケに――」

「今すぐここから立ち去るがよい！　さもなければお前の命は……！」

さらにポーズを変え、叫び続ける四音。

しかしその直後、魔眼から赤黒い光が放たれ――。

『え――？』

「あ……。……分かったよ。仕方ねえな、ダチには謝っておくか……」

何故か男は諦め、その場を立ち去っていった。

後に残された俺と四音。

彼女は、呆然と立ち尽くしたまま――。

「……んはあっ！」

『……へ？』

全身を駆け巡る快感——。

脳髓まで痺れるほどの、電流に似たなにかが俺の全身を貫いていく。

……いや、違う。

これは、四音の身体が——？

「はうん……！ なananなんですかこれえ!? あっ……んっ！ 立っていら、れないですう……！」

その場にへたり込んでしまった四音。

『うわっ、こ、これは……？』

四音の身体を通して、俺の五感のすべてが快感に侵されていく。

まさか、魔眼の力が発動して……？

『うっ……。まさか……他者に命令することの出来る力ってわけかよ……！ 今度の俺の力は……！』

「うええん！ お母さああん！ んんっ……！ なんなんですかこれえ!! なんか怖いですよ!! ……ひゃんっ!!」

そこには一人の少女と、魔眼と成り果てた者が喘ぎ、もがいているという、世にも不思議な光景が展開されていたのだった。

【BLAZE DANCER ONLINE】

2200年からサービスが始まった世界初の民間用VRMMO。

略語は『BDO』もしくは『ブドー』。

運営元は《クリプトゼグノ社》。

専用のログイン機器を使い、ユーザーの意識ごとVRMMOの世界へと誘う。

現実の世界の肉体情報がリンクされる為、VRMMOの世界での『死』が現実世界での『死』と直結してしまう可能性が存在する。

それを防ぐため、ログインの際には必ず《復活リブース》という項目を課金により購入。

VRの世界で死亡した際にはこの機能を使い、再度ログイン画面に復活出来る仕組みになっている。

「ひっぐ……ひっぐ……おえっ」

『分かったから……分かったからもう泣くなよ四音……』

図書館までの道中、四音はずっと泣いたままだった。

無理もない。

彼女はまだ高校一年生なのだ。

それなのにいきなりこんな快樂の波が押し寄せてきたら、とてもじゃないが耐えられないだろう。

(それにしたって……想像以上だったな……)

四音の五感を通じて、俺の五感にまで押し寄せてきた快樂の波。

今思い出しても恐ろしい……。

「うええええん……お母さああん……おえっ」

『……はあ……まったく……』

結局俺は四音をなだめ続ける羽目になった。

これだから子供は嫌いだ。

正直こんな時、どう接していいのか、加減が分からない。

俺は何度も溜息を吐きながら、さっさと泣き止んでくれないかと強く心に願っていた。

図書館に到着した俺達は、小さなモニターの数台並んでいる部屋に足を運んだ。

『へえ……。これが未来のパソコンってか。どうやって入力するんだ、四音？』

見たところキーボードのようなものは見当たらない。

四音はちよつとだけ鼻で笑いながら、画面の前に座り、手を翳す。

すると空間に薄い緑色をした、半透明のキーボードが出現した。

『え？ これって……』

それはあの異世界でいつも出現させていたウィンドウにそっくりだった。

四音は手馴れた様子でキーボードを叩いていく。

(……まあ、二百年も経てば空間にキーボードを出現させる技術くらいはあんのかもな……)

俺はさして気にもせず、画面に映しだされた様々な情報を食い入るように見つめる。

「ええと……お名前は確か、七瀬薫さんで良かったんですね、軍曹？ じゃあ『かおるん』で検

索——」

『怒るよ』

「うう……。冗談に決まっているじゃないですかあ……」

画面には匿名掲示板のようなサイトが映し出されている。

その中に『BDO死亡者リスト』という項目が存在していた。

誰が作ったかは知らないが、どちらにせよ裏サイトなのだろう。

一番上から流し読みしていった俺は、見たことのある名前をいくつか発見する。

『……リーダー……葛間大都……？ それに御堂玲人^{みどうれいじ}と大黒俊介^{おおくろしゅんすけ}……。こいつらはユーザー名も本名だったってわけか……』

リストには【ユーザー名／実名】という形で無数のプレイヤー情報が記載されていた。

一つしか名前が載っていない場合は、それが実名だとすぐに分かる。

「うわぁ、ついこの前までは数十名くらいだったのに、なんですかこの数は……？ 千人超えてるじゃないですかぁ……」

『千人……』

俺はあのとときのメアルの一方的な虐殺の記憶を思い出し、身震いする。

たしか《ラインハルド騎士団》とか言ったか。

彼等もこの死亡者リストに載っているのだろうか。

「でもこれ、まだニュースでは取り上げられていませんよねえ……。前々から思っていたんですけど、このサイト、一体誰が管理しているんですかねえ、軍曹」

『俺が知るかよ……。それよりも薫だ。七瀬薫。しっかりと探せよ四音』

画面をスクロールさせながら、目を皿のようにして薫の名前が無いか探す俺達。

その途中で【ビーター／John Rebene】という名前を発見する。

ザールツレイム帝国の首都アルゼクトでの激戦――。

そのときに襲撃してきた未来人達のリーダーが『ビーター』という名の男だった。

（あの野郎はどつかの国の外人だったか……。まあ身長が軽く二メートル超えてたからな……）

「……うむう。無さそうですね。このサイトの情報が正しければ、かおるんはまだ生きていますということになるんですかねえ……」

『そうだな……。だとすると今度は――』

確かに以前に薫の出身校を聞いたはずだ。

北海道立……鳴海^{なみ}高校……だったか？

俺は四音に『鳴海高校』で検索を掛けてもらう。

するとホームページに飛び、所在地が明らかとなった。

「ここからそんなに遠くないですねえ。行ってみますか？」

『え？ いいのか？』

意外な反応に驚く俺。

確かに高校まで足を運べば、薫が入院しているであろう病院の場所を聞き出せるかも知れない。

彼女の無事を確認するのなら、実際に会って確かめるのが最も確実だろう。

「もちろんですよ、軍曹。私、こういう探偵みたいなのが好きなのですよう。ふっふっふ……何だか燃えてきましたねえ……」

さっきまでの泣き顔が嘘のように、四音の表情は輝いていた。

「いまいちこいつの考えていることが理解出来ない……。」

『なら、すぐにでも出発しよう。てかお前、高校生だろう？ 学校はいいのか？』

「え？ あ、はい。私、今現在は自主的登校拒絶期間を実施中であります」

『……』

それって、ただの登校拒否ってことじゃなかよ……。

もしかして学校でいじめられているとか……？

確かにこんな格好で、こんな発言ばかりしていたら、孤立したって文句は言えないのだろうが。

「あ、いじめとかではないですよ？ ただ夏休みの宿題を全くやらずに放棄してしまったので、先

生に怒られるのが怖くて登校していませんだけです。うちの親は甘いですからねえ。何だかんだ理由を付けければちよちよいのちよいなのです、軍曹」

『……あそ』

素っ気なくそう答えた俺。

何だか心配して損した……。

それから俺達は《クリプトゼグノ社》のことや《ゼイグリス社》の詳細を調べてみたが、大した情報を引き出すことが出来なかった。

そして、ふと思いつき『魔眼ゾルディ』で検索してみると、興味深いサイトに繋がった。

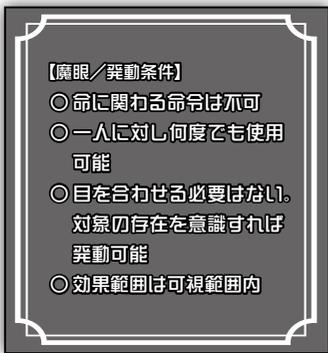
「なんですかねこれ……。旧約グランドヴェルグ聖典解体新書？」

四音が手馴れた手付きでサイト内の情報をスクロールしていく。

『まさかな……。ブドーとも関係のなさそうなサイトだし、偶然だと思うが……』

その中で魔眼の説明文に辿りつく。

そこにはこう書かれていた。



「……」

『……』

俺達は黙り込む。

「まさか、ですよねえ」

『まさか、な……』

同時にそう呟いた俺達は、そつとそのサイトを閉じる。
何か見てはいけないものを見てしまったかのような雰囲気で――。

「と、とりあえず、その鳴海高校に行ってみましょうか、軍曹」

『あ、ああ。そうだな……』

何だか微妙な雰囲気になってしまった俺達は、そそくさと図書館を後にし、薫の通っていた北海道立鳴海高等学校に向かうことにした――。

十

「よつと……これでよし、です」

一旦自宅へと引き返し、着替えを済ました四音は鏡に向かい敬礼のポーズをとる。

まあ、着替えといつても下着を取り替えただけなのだが。

……何故下着を替えたのかは言及しない。

『ここから薫の学校まではどれくらいなんだ？』

「鳴海高校は岩見沢いわみざわのほうですから、ここから約一時間くらいですかねえ」

クマのぬいぐるみカバンを背負いながらそう答えた四音。

『……そのカバンはギリギリ許容範囲内だとして、何故スナック菓子をそんなに詰め込むんだ、四音』

「へ？ いやですよ、軍曹。まさかおやつは三百円までとか言わないでしょうねえ。あ、ちなみにうちの高校はバナナもおやつの内――」

『そういうこと言ってるじゃねえっつもの！ 遠足に行くんじゃねえんだから、お菓子は持っていないでもいいの！』

「うぐう……。軍曹はやはり、鬼教官なのですよう……」

泣く泣くお菓子を半分ほど取り出し、机に置いた四音。

全部出せコラ。

数分間のやり取りの後、仕方なく数袋はOKを出した俺。

こんなことで時間を食ってはられない。

もう一度自宅を出発した俺達は、札幌駅方面へと足早に歩を進めた。

十

「やっぱりこの時間は空いてますねえ。何だか得した気分ですよ」

鈍行列車に乗車した俺達は、誰もいない車内で外の風景を眺めながら雑談する。

というか鈍行列車……。

二百年後の未来なのに、こういうところは進化してねえのかよ……。

「あ、軍曹？ 今、何気に心の中で未来の日本の技術を馬鹿にしましたねえ？ 本当は快速列車に

乗れば岩見沢なんてものの五分で到着するのですよ。しかし、あえて私はこの昔懐かしい鈍行列車に乗車したわけなのです」

『……なんでだよ。急いでいるって何度も話しただろうが……』

「いい質問ですね。ならばガツンと申し上げてみせましょう。一言でいうと、お金がないから、です！」

胸を張り、そう言い切った四音。

理由は簡単だった。

今乗っている昔ながらの鈍行列車は、北海道民に無料で提供されているのだそうだ。

この時代ともなると時速千キロやら二千キロの乗り物は当たり前らしい。

まだ高校生の四音は当然懐に余裕などなく、この無料列車に乗る以外に方法は――。

『……お菓子をかうのを少し控えれば切符くらい買えたんじゃないか？』

「……それは言わないで下さい、軍曹……」

一気にしよぼくれた四音。

しかし、あまり俺も強く言える立場では無い。

それよりも四音が協力的で助かっている。

後で頭をなでなでしてやる。

……出来ないけど。

そんな雑談を交わしていると、別車両から一人の男が歩いてくるのが見えた。

黒いスーツにサングラス。

手には何やらスマートフォンのような物を持っている。

(何だかあからさまに怪しいな……)

ウキウキで車外を覗いている四音は、男を視界の端に捉えながらも意識は外に向けたままだった。

ていしか座席に膝で乗るな。

パンツ見えてるぞお前。

「……ちよつとお嬢さん、宜しいかな」

「はい？」

サングラスの男は立ち止まり、四音に声を掛ける。

男はスマートフォンのような機械の画面と四音を交互に見比べていた。

(!! あれは……!)

男が持っている物に見覚えがある。

薫を襲ったあの「リーダー」こと葛間大都が持っていた、他プレイヤーの位置を知らせる『PP

S・NAVY』とかいう代物ではなかったか。

何故、そんなものをこいつが――？

男はじろじろと四音の全身を舐め回すように見ている。

「……なんですか？ 変なことしたら、大声出しますよう？」

四音が緊張しているのが分かる。

しかし尚も男は、執拗に四音の全身を確認していた。
……何だ？

何かを探しているのか？

「……ふむ。こんな少女が持ち主のわけがないだろうが……。ちよつといいかな、お嬢さん。いくつか聞きたいことが——」

男が四音の腕を掴んだ。

俺達の間で一気に緊張感が高まる。

「何をするんですかあ！ 止めて下さいよう！」

抵抗する四音。

男は両手で四音の腕を押さえつける。

『何なんだよこのおっさんは！ ……いや、持ち主……？ まさか——』

確かあの黒タイツの葛間が持っていたナジは未来人の居場所を表示する機能が付いていたはずだ。もしも、それと同じような機能がこの男の持つ機械に付いていたとすると——。

『くそっ！ なんか知らんが目的は俺か？ 四音！ 眼帯を外してこいつに命令しろ！』

「え？ あ、はいですう！」

男の腕を振りほどき、四音は左目の眼帯を勢いよく外す。

「赤い目……！ そうか、今度の形状は『魔眼』……!!」

『こいつ、やつぱり……!!』

男が懐に手を入れるのが見える。

しかし、間一髪四音の命令の方が早かった。

「我、汝に命ずる！ 今すぐ記憶を消し、ここから立ち去れッ!!」

そう四音が叫んだ瞬間、赤い目が赤黒い光を放つ。

うん。

そのポーズとその台詞とか、多分いらない。

正直、頭が痛い……。

「……あれ？ 俺は一体ここで何を……。まあいいか……」

男は何もなかったかのように、四音の腕から手を離し、奥の車両へと歩いて行ってしまった。

『ふう、あつぶねえ……。あれはきつと懐に拳銃とか——』

「はあああんっ!! あっ、あっ、ああんっ!!」

直後、座席の上で仰け反ってしまった四音。

『あ……忘れてた』

「んんっ！ ぐ、軍曹う……！ また私……ああっ！ ひっぐ……お母さあああああん!! んんんっ!!」

誰もいない車内で一人、喘ぎ声をあげる四音。

マジで良かった、誰もいなくて……。

俺はビクンビクンと痙攣している四音を無視し、思考する。

あのサングラスの男は確かに『魔眼』と言った。

ということとは、こっちの世界——つまりは現実世界に俺が飛ばされてきたことを知っている——？

(まさか、ずっとマークされてたつてわけじゃねえだろうな……)

「ああああッ!!」

四音の声がうるさい。

集中出来ないからもう少し静かにして。

(でも、それが出来る奴が一人だけいるな……)

あの日、召喚された百万の未来人の前で、高らかとデスクゲームを宣言した人物——。

おそらくGMゲームマスターであろう奴ならば、異物である俺の存在を逐一モニターしていたとしても、なんら不思議はない。

ならばあの時、宮廷でメアルが俺を未来の世界に飛ばした瞬間も、モニターングしていたということか？

もしもそうであるならば——。

(やべえな……。多分、あの図書館で『魔眼ゾルディ』なんて検索しちゃったから……)

そこから情報が漏れ、俺の所在が調べられたのだとしたら——。

あの男が四音の目を見た瞬間に、魔眼という言葉が発した理由も説明が出来る——。

「んんッ！ お母さあああああん!! ……おえっ」

もしかしたら、あの黒服の男が持っていたナビは、俺の所在がプロットされたナビということなのかもしれない。

恐らく、持ち主である四音をプロットしているのではないはず——。

そう考えれば、今の四音の命令は功を奏した。

相手の記憶を消せることも分かったし、今回のように車内で一人きりみたいな状況にさえならなければ、俺の持ち主が誰なのか特定することは難しいだろう。

『なるべく人が多い場所を通るか……。あのサングラスみたいな野郎が一体何人いるかは分からねえけど……』

俺は泣きじゃくる四音に苦笑しながら、彼女を慰める言葉を考える。

何だかこいつを見ているとリリーを思い出す。

もしも同じ世界に生まれていたのだとしたら、こいつらはきっと友達になっていたのだろうな、とか考えてしまう。

「ひっぐ……ひっぐ………おえっ」

『分かったから。な？ 後で持ってきたお菓子でも食べようぜ。下着の替えもいくつか持ってきておいて正解だっただろう？ 向こうに着いたらトイレで着替えて——』

——俺は泣き止まない四音を慰めながら、恐らく背後にいてであろう《ゼイグリス社》に思いを巡らせていた。

閑話…リリーのその後①

「むにゃ……あれれ？　ここは……どこですかあ？」
目を覚ます。

そこは見知らぬ森の中。

「あれ？　デメルさん？　薫ちゃん？　ガネーシャちゃん？」
辺りを見回しても誰もいない。

手元には、私の子供である魔弓がしっかりと握られていた。

私は我が子をぎゅっと抱き締め立ち上がる。

「ううう……。皆、あの魔女さんの攻撃でバラバラに飛ばされてしまったのですかねえ……」

急に心細くなる私。

すると、背後で何かが動く気配がした。

「ただだ誰ですかあ!!」

反射的に魔弓を構える。

森の奥で蠢く物。

それは一つや二つではない。

私は目を凝らし、森の奥を凝視する。



「……」
私は開いた口が塞がらなかった。

「……」
私の目玉は飛び出たまま戻らなくなった。

「……」
私はおしっこを漏らしそうになりながら、全身に鳥肌を立てた。

「……この森ってまさか……」

周囲の木々がモゾモゾと蠢いている。

え？

この森の木が、全部——？

「嫌ああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

私は泣き叫びながら、森を駆け抜ける。

ここは恐らく、噂に聞いたことのある《ナメクジプラントの森》だ。

私がこの世で最も苦手なモンスター。

あの触手で散々、色んなところを色んなことされて、もはやトラウマでは済まされないレベルなのだ。

逃げなくては——。

いや、百匹って——。

無理無理。絶対無理。

気絶しそう。

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理いいいいいいいいいい！！！」

迫りくる触手を避けながら、私は悪夢の逃走劇を繰り広げることとなった——。

十

「ここですね」

岩見沢駅から徒歩十五分ほどの場所にある鳴海高校の前まで到着した俺達。

ちょうど下校時間なのだろうか。

多くの生徒が校門からわらわらと出てくるのが見える。

『……ところで、四音』

「？　なんでありますか、軍曹」

『……なにしてんの』

校門から少し離れた場所で尻を突き出しながら、変なポーズで電柱の陰に隠れている一人のゴスロリ少女。

恐らく、後ろから見たらパンツが丸見えなのだろう。

というか電柱撤去しろよ……。

未来の世界はもう電線使つてねえんだからよ……。

「なに、とは心外です軍曹。当然、隠れているのです。邪悪な気を発する者に見付からぬよう——」

『あ、丁度いい。こっちに向かってくるあの男女のカップルに薫のことを聞いてみてくれ、四音』

「……思いつきスルーされて、私の心はズタズタなのであります、軍曹……」

すぐくシヨンボリした四音は肩を落としながら男女に近づき、声を掛ける。

「ああ、七瀬だったら——」

男女の片割れが、たまたま薫と同じクラスだったらしく、薫の入院している病院までの道筋を詳細に教えてくれた。

四音は二人に敬礼をしながら礼を言い、俺達はその場を後にした。

「でも良かったですねえ。かおるさんが無事だと分かって……」

道中でスナック菓子を食べながら四音は言う。

『ああ。……ていうかお前、さつき襲われたばかりなのに意外と堂々としてんのな。普通はもっと怯えたりするもんだと思うんだが』

あの後、岩見沢駅の公衆トイレで下着を穿き替えた四音。

もしもその時、四音がこれ以上の探索を拒否すれば、一旦自宅に帰る覚悟は出来ていたのだが……。

「ふっふーん。聞きたいですかあ？」

悪い顔をする四音。

いや、実際には顔は見えないんだが。

『……なんだ？ くだらないことだったら、さつきのお漏らしをばらすぞ』

「ぬああっ!! だ、誰にですかあ!! ……ていうか軍曹、私以外の人と喋れないじゃないですか……」

簡単に騙された四音。

駄目だこいつ。

リリー以下だ、多分。

「……こぼん、えつとですねえ。私、実は今までの人生ですねえ。かれこれ、五回ほど誘拐されたことが御座います」

呆れた俺に四音は説明を続ける。

なんでも、このゴスロリファッションでうろうろと街中を歩いていると、かなりの高確率で変な輩やからに声を掛けられるのだそうだ。

時には裏路地まで連れ込まれたりもしたらしい。

しかし、何故か運よくその場を切り抜けられ、五体満足のまま今に至っているとのことだった。

「つまりは五回とも、何の被害もなかった、という武勇伝なのですよ」

『……』

「……軍曹？ なんかコメントください」

呆気にとられた俺だったが、しかしこのときの四音の言葉にある可能性を見出していた。

(もしも、この未来の世界にも【LUC】のステータスが存在していたら——)

いや、そんな筈はない……。

あれはあくまでVRMMOというゲーム内での仕様のはずだ。

俺は現実と仮想世界の違いも認識出来なくなってしまったのだろうか……。

しかし——。

『俺という存在が、今、ここにあるという理由……』
「おお！ なんですか、その物凄く深みを帯びた排他的且つ断罪的なテーマは！ オラ、ワクワクしてきましたよう！」

「何だかわけの分からないことを叫び出した四音を無視し、俺は病院までの道中で様々な可能性を熟考していた」。

十

鳴海高校から更に徒歩二十分ほど行った場所にある、大きな総合病院。

受付で面会の手配を済ませた俺達は、薫のいる三階の病棟まで足を運んだ。

「ううう……。あの受付のお姉さん、すつごい訝いふかしげな顔で私のことを見ましたよねえ……」

『そりゃあ、そうだろ。病院にそんな格好で来る奴の気がしれねえよ……』

「そんなことないですよ！ これは私にとって第二の制服ともいうべき神聖なるゴスロリ——」
通路に立っていた年配の看護婦に凄い顔で睨まれ、黙る四音。

そりゃ怒られるわ……。

俺の声は四音にしか聞こえないが、四音のデカイ声は周りに聞こえているんだから。

「……今の看護婦さん、この前見たホラー映画のお化けより怖い顔していましたよう……」

『……そうか』

そうこうしているうちに『322 七瀬薫』と記載された病室まで辿りつく俺達。

部屋の中は四つのベッドがあり、その全てに人が横たわっていた。

『やっぱりどの部屋も満室だって話は本当みただな……』

「はい。この病室も、元々は二人部屋みたいですし……」

部屋の中を見回した四音はそう呟く。

しかしそれも仕方のないことだろう。

一夜にして百万もの人間の意識が戻らなくなったのだ。

この近辺に住んでいる人だけでも、一体どれくらいの人がこの病院に運ばれてきたのだろう。

「かおるんは……一番奥のベッドですわね……」

部屋の奥に歩を進めた四音。

分厚いカーテン越しに、少女の寝息が聞こえてくる。

四音はそっと手を伸ばしカーテンを開けた。

そして、その先に彼女はいた。

『薫……』

酸素マスクのような物を取り付けられ、腕には点滴の管が通っていた。

時折、瞼の裏で眼球がピクピクと動いているようにも見えたが、恐らく夢でも見ているのだろう。

今、彼女はグランドヴェルグの地でどのような状況に立たされているのだろうか。

「……あ、いいことを思いつきました。私の魔眼でかおるんに『目を覚ませ！』と命令したら、一体どうなるのでありますか、軍曹？」

『え？ あ……』

確かに四音の言うとおりだ。

ダメ元でも、試してみる価値はある――。

『そうだな……。でもここは病室だ。やるなら小さな声で頼むぞ、四音』

「……分かりましたのであります」

ビシッと敬礼のポーズで応える四音。

そして彼女はおもむろに眼帯を外し、魔眼を露にした。

「――我、汝に命ずる。永遠の眠りに囚われし姫君よ。その久遠の戒めから、今こそ解放せん――」
赤黒い光が辺りを照らし出す。

『……どうだ……？』

俺はベッドの上の薫に視線を移す。

しかし、何も変化は見られない。

『駄目か……』

だが、これで新たな検証が出来たことになる。

魔眼は、意識のある者にしか効果を発現しない――。

これが分かっただけでも、無駄に能力を使用することは――。

「ぐ……ぐぐぐぐ……ぐぐぐぐぐぐぐ……！」

『……あ』

すごい顔で、一生懸命に耐えている様子の四音。

いいぞ、頑張れ四音……！

ここは病室だ。しかも四人部屋だ。

俺達以外に誰も面会の人がいらないとはいえ、入り口のドアは開いたままだ。

こんな所で喘ぎ声を漏らしたら大変なことになってしまう。

「うううう……！ が……ま……ん……！」

『いいぞ、その調子だ四音！ 病室のすぐ先にトイレがあったはずだ！ そこまでは何とか我慢しろ！』

「は……は……！」

慌てて内股走りで病室を後にする四音。

廊下では先ほどの年配の看護婦が四音の様子に気付き、声を掛けようと近づいてきていた。

『まずい！ あの看護婦に捕まったら恐らく大変なことになるぞ四音！ そのままトイレに突っ込め!!』

「ラ……ラジャーで……ありますう……!!!」

「ちよつとあんた、大丈夫かい？」

看護婦の手を掻い潜り、トイレへと直行した四音。
そして個室のドアを勢いよく締め、トイレの水を盛大に流し――。

「はああああああああああんツ!!!」
――彼女は、果てた。

十

「ひっぐ……ひっぐ……おえっ」

『もう泣くなよ四音……。良かったじゃねえか、今回は間に合ったんだから……。』
病院を出た俺達はそのまま岩見沢駅へと戻っている最中だ。

薫の無事も確かめたとし、魔眼も彼女には効果が無いと分かった以上、長居しても仕方がない。
もつと彼女の寝顔を眺めていたかったのは事実だが、面会時間にも限度がある。

他に特にやることも思い付かなかった俺達は、その足で自宅に戻ることにした。

「そういう問題ではないのですよう、軍曹！ あの後、すぐにあの看護婦さんがトイレに乗り込んで来たじゃないですかあ！」

そう叫んだ四音は大きく肩を落としたような垂れた。

あの怖い顔の看護婦は本気で四音のことを心配してくれた。

トイレの個室で泣き叫ぶ四音に声を掛け続けてくれたが、逆にそれが野次馬を集めることになっ

てしまったのだ。

外側から無理矢理鍵を開けられ、救出された四音の姿に、野次馬達はどん引きした。

そして、そのまま彼女は診察を受けることになったのだ。

頭がおかしくなっちゃった子、として――。

「私は別に何処もおかしくなんか無いのですよう！ それなのに……ぶつぶつぶつ……」
怒りが収まりきらない様子の四音。

診察では一過性の興奮状態と判断され、思春期によく見られる症状だとして事無きを得たのはいいのだが……。

『まあでも、これくらいで済んでよかったじゃねえか。左目が赤いのもカラーコンタクトつてことで逃れられたし』

「よくなんてありませんよう！ 私の経歴に傷がついたのですよ！ 将来、進学や就職に不利になつたらどうしてくれるんですか、軍曹！」

『いや……ならねえだろ……』

騒ぎ出す四音を何とか宥めながら、来た道を帰っていく俺達。

しかし俺はその間、ずっと嫌な視線を感じていた。

『……四音。そのまま聞け』

「なんですかあ！ 私の堪忍袋の緒は切れる寸前で――」

『……病院からずっと後をつけている奴がいる』

「へ——？」

四音の緊張が直に伝わってくるのが分かる。

数は——恐らく四人。

『電車内で会った黒服の仲間か……？』

「どうしますか、軍曹？ 逃げますか？」

意外にも落ち着いた声でそう答える四音。

いや、こういうのには慣れてるんだったか……。

『ふむ……良いチャンスだな。少しは魔眼の検証をしてみるか……。四音。お前、手鏡を持っていたよな？ それで尾行している奴等をそれとなく確認出来るか？』

あのネットに書かれていた情報を鵜呑みにするわけではないが、魔眼の効果範囲は検証しておきたい。

本当に有効なのが可視範囲内だとして、鏡越しでも効果を発揮するのか——。

もしもそれが可能ならば——。

「はい。全員は確認出来ないのですが、二名の黒服は確認しましたであります、軍曹」

確かに手鏡を覗くと二名の黒服が映っていた。

『何か命令をしてみる、四音』

俺の指示で眼帯を外す四音。

「はい。では——我、汝らに命ずる。性別を乗り越えた愛に生きる若者よ。その心に溜まった欲

望を、今ここで解き放つがいい——」

『おいおい……。その命令は……』

魔眼から放たれた赤黒い光は、手鏡を反射し後方にいる黒服達へと注がれる。

さて、結果は——？

「……なあ、相棒」

「……なんだい、ハニー」

俺達を尾行していた二名の黒服は、突然、道のど真ん中でキスを始めた。

「おい！ お前ら一体何を——」

その様子に気付いた残り二名の黒服が物陰から飛び出してくる。

『やはり魔眼の効果範囲は可視範囲内で行けるか……。鏡越しでも効果はあるし、複数人に同時発動も出来る……』

「あつ、ああつ、あああんっ!!」

四音の喘ぎ声に気付いた残りの黒服二名。

「ちっ！ 何かしやがったのか、あのごスロリ娘が……!」

慌ててこちらに向かってくる黒服に、アへ顔の四音はもう一度魔眼を発動する。

「んんっ——我、汝らに命ずるウンツ!! 内から湧き出でる欲望のままその本心を解き放ち、性別を越えた愛へと変換させよ——! はあああああんっ!!」

『……だから……』

